

風の吹くままに

(八月十二日、日 ロンドンから真夏のパリ入)

前々夜からの野宿二連泊では余り質の良い眠りは得られなかった様なものだが、昨夜の十二時ロンドン発パリ行の列車に乗り、深夜には窓外の風景も眺められないので、三日ぶりくらいで心地よく眠れたものだった。

早朝に目覚めたときには、列車は見渡す限りの平原の中を只、ひたすらに頑張って走り続けていた。

寝ている時には全く、気付かなかったことだが、いつの間にか、どうやって海峡を渡ったのだろうか、そのスムーズな手際の良さには感心させられたものだった。

そして、パリ・ノール駅に到着したのは午前九時を少々回った頃だった。

スコットランド方面へのピッチハイクの道中では、やや天気が崩れ気味だったこともあり、肌寒さを感じる様な気温だったのだが、昨日のロンドンでは再び、真夏の暑さに戻り、今日のパリ到着ではさらに、サウナにでも入った様な猛暑となった。

八月十二日の今頃と云えば、日本では丁度、お盆を迎える時期であり、残暑の一番厳しい様な時期ではあるので、まあ、同様な処だろうか。

それにしても、パリに着いたとたんに不便になってしまったことは、殆ど、店頭などでの英語が通じなくなりましたことだ。

多分、観光地であれば、多少なりは通じるのだろうが、小規模店舗やスーパーなどでの買い物時での会話が成り立たなくなっていましたので、何某かの買い物をするにも、「幾らですか?」とフランス語で訊くことは出来ても、応答が聞き取れないので、結局は、適当な金額を掌に掌せて、取ってもらおう様な買物になってしまった。

ともあれ、公園のベンチにでも掛けて、パンと牛乳、キュウリくらいでの簡易な食事を摂る。

特に、一日の行動予定と云うのは何も無いのだが、セーヌ川の畔やノートルダム寺院、他、市内のあちこちをマップを見ながら適当に散策、見学して回る。

とにかく暑いので、一日は、北欧方面へ向けての脱出をしたい。

この後の夜行ではパリを発って、まずはアムステルダムへ向かい、その後には、さらに涼しそうな北欧の方を目指すことにより、と思う。

どうせ、パリには、また来月に舞い戻って来る頃には、少しは暑さも和らいで、歩き易くなっているだろう。

(八月十三日、月 アムステルダム初日)

前夜遅くのパリ発に乗り、アムステルダム中央駅に着いたのは朝の九時五十分であった。

まずは、駅の画替所でオランダ通貨への画替のあと、荷物を預けてから街の散策とした。

特に、アムステルダムについての事前の予備知識を有するものではないので、適当にあちこちを巡り歩きながら、市内の路面電車を利用した際には驚くべき光景に遭遇した。

私が乗車した時には、凡そ、十数人ぐらいの先客が乗り合わせていたのだが、とある停車場に停まり、前方の乗車口と後方出口のドアが開き、切符の検札らしきおばさんが前方入口から乗車した瞬間に、何と、先の乗客の殆どが後方ドアからドタバタと慌てて駆け抜け、逃げ降りてしまったのだ。

一瞬の出来事であり、後に残ったのは、私の他には一名か二名の乗客のみだった。

つまりは、私とその一名か二名の乗客以外の全員がいわゆるキセルの無賃乗車と云うことだった様だ。

まさに、日本では見たこともないと云うか、考えられない光景であり、本当に驚き、また、多少なりは、滑稽な印象でもあった。

午後には、日本から進出している『大手ホテルチエーンのアムステルダム支店』に勤務されている私の東京でのアルバイト仲間である友人のお兄さんに電話連絡を入れてみた処、夕方の五時半頃に、同ホテルロビーでの待ち合せで会うことになった。

それ迄の時間潰しとしては、市内のあちこちを散策見学していたが、その内には芝生の原っぱに辿り着いたので、夕方の間、ベンチでの昼寝とした。

夕方の五時を過ぎた辺りで目が覚めたので、早速、同ホテルへと向かう。

土地勘がないのに加えて、電車等の利用も良く解らないので、市内図を見ながら歩いていくところ、予定の五時半を少し過ぎた頃には辿り着いた。

ホテルのロビーでは無事に友人の兄、黒川さんに会うことが出来た。

初対面ではあったが、友人からの、事前での一報は入れてあった様で、話もスムーズに運んで、大変、喜んで頂けての歓迎ぶりだった。

夜には、同僚の吉川さんを含めた三人で、日本料理店『京』へ案内され、ジンギスカン等の料理で、久しぶりに腹いっぱいのご馳走になった。

こんな、地球の反対側みたいなおもしろさまで来て、日本語での会話が十分に通じる出逢いがあり、しかも、腹いっぱいのご馳走にまで有り付けると云うのは、何とも幸せな有り難いことだろう。乾杯をしながら、日本の話題にも花が咲いたひと時だった。

（ 八月十四日、火 アムステルダム二日目 ）

翌日には自転車を借りることが出来たので、特に目当ても無いのだが、終日、アムステルダムの市内を縦横無尽に見学して回った。

アムステルダムでは坂が全く無いので、周遊するには自転車での移動が最適なのだ。

夕方五時には黒川さんの仕事が終わると云うので、その時刻にはホテルの前庭で待ち合わせることになった。

ホテルでは社員食堂での夕食をご馳走になり、その後には吉川さんを含めた三人で周辺への散歩に出かけて写真を撮ったり、持参の八ミリフィルムに撮影したりして過ごす。

（八月十五日、水 アムステルダム三日目）

朝は早めに起床し、黒川さんの出勤に合わせて、自転車を借りての市内観光へと出勤する。

市の南部を中心に周り、運河沿いにある公園や風車を見学し、遊覧船に乗船してひと巡り。

その後には、名物のオープンマーケットやノミの市を見て歩く。

この処、好天気続きのために、今日も雲ひとつ見当たらない様な、日差しが強くて暑い一日だった。

そろそろ、今夜あたりの夜行に乗って、次のハンブルクにでも移動しようかなとの思惑ではあったが、時刻表を確認すると、夜八時過ぎの列車では到着が真夜中になるので、翌日の出立にした方が良さそうかと思いつままる。

夜には、やはり、黒川さんの案内で、近くのレストランでの夕食をご馳走になった。

（八月十六日、木 アムステルダム四日目）

朝の便での出立を考えてはいたが、昨夜来の寝不足から、目覚めの悪さと、黒川さんも、今日は仕事が休みだから一緒に市内観光にでも出掛けようかという誘いがあり、ハンブルク方面へ向けての出立は翌日への順延とした。

午後には一緒に「リッホ美術館を見学していたが、二時半からは、会社の同期新入社員の写真撮影会がある」と云うので、一旦は美術館内で別れることにした。

夕方には、吉川さんを含めた三人で落合い、夜には日本料理店『十篤』での寿司をご馳走になった。

アムステルダムまで来て、日本料理の寿司までご馳走になり、本当に嬉しくもあり、感激ものであった。

それにしても、今回の旅行中には、黒川さんのアパートには四泊もお世話になってしまったも



のだった。感謝。

（八月十七日、金 ハンブルク）

朝には、なるべく早めに・・・との思惑ではあったのだが、七時四十四分発のハンブルク行き直行便には間に合いそうになくなったので、次の八時四分発の列車を当てにして、黒川さんの出社に合わせて一緒にアパートを出た。

途中での乗り換えが必要な便であり、アーメルスフォールトでの乗継便をミスってしまい、やむなく、他の便でのエクスプレス、ミュンスターと乗り継いで、ハンブルク中央駅に漸く到着したのは夕刻の四時過ぎだった。

かなりの遠回りとは大きな時間のロスとなってしまった。

取りあえずは、今夜のユースを探して落ち着きたいところだが、中央駅からの地下鉄利用に際しては、通りがかりの人に尋ねたところ、わざわざ、丁寧に道案内をしながら教えて頂いた。

ドイツ人の親切に接して、有難く、嬉しい気がしたものだ。ミッテ川沿いにあるランドングスブリュッケンのユースホテルに無事到着した。

貧乏旅行なので夜遊びのつもりはないのだが、只、初めて訪れたハンブルクの、夜の街の雰囲気くらいは味わっておくのも悪くないだろうとは思ったので夜の街に繰り出してみた。

かのビートルズも下積み時代にはこの地のバーやナイトクラブなど、あちこちのお店のステージでは頑張っていたそうだ。

スーツを着て、すました様な昼の顔のハンブルクも、夜の顔では一変する。

歓楽街では赤紫色の照明が怪しい雰囲気を感じ出し、活気に満ち溢れるのだ。

通りには、『飾り窓の女』の妖艶なお姉さんたちが行き交う男たちに、目線が合うとワインクを送り、投げキスを送っては熱心に誘いかけて来る。

通りがかりの書店の店頭には、日本では絶対に目にすることさえあり得ない、激しい内容の写真雑誌がこれでもか、これでもかと云う程に溢れている。

ペラペラと頁をめくると、脳幹からつま先までの血が逆流する様な、余りの衝撃の大きさには眼がくらみ、暫くは、その場からの身動きが出来ない様な状況に陥っていたものだった。



（八月十八日、土 ハンブルク二日目）

午前九時過ぎにユースをチェックアウト。

聖ミカエル教会や市庁舎等を見学して歩き回った後に、一日、中央駅のコインロッカーにリュック等の荷物を預けてから、再度、美術館や市内観光案内に載ってる主だった様な箇所、アルスター湖、ハンブルク大学などを見学して回る。

市内のあちこちでは、しばしば、日本人観光客を見掛けるが、これ迄の処では、ロンドンに次いで日本人観光客が多い様だ。

(この時代には、日本人以外の東アジアからの観光客は殆ど滅多には居ないので、東洋人の顔をしていたら、ほぼ、日本人と云えるだろう)

数日前のパリでは真夏の暑さだったのだが、北方へと上るに連れて、既に、夏から初秋への季節の移り変わりが感じられる様だ。

夕方になるに連れて、少し肌寒さが感じられる陽気になって来た。

今日は土曜日でもあり、殆どの店が早仕舞の様だ。これ以上に街中を散策しても何の見どころもなさそうなので、今夜の夜行では次のコペンハーゲンに向かうことにした。

再び、中央駅に舞い戻って来たので、駅構内のスタンドスナックで腹の足しにでもなりそうなものをと、メニューを見ていた処、ポンポンと後ろから肩を小突かれて、日本語での声を掛けられた。

「日本人の方ですか？」

「エッ、ああ、そうです」

振り返ると、褐色に日焼けして、やや、衣服も薄汚れ気味で、異臭の感じられる日本人の若者だった。

話を聞くと、南回りでの旅をしていたが、途中の東南アジアでは強盗に遭って無一文になってしまい、インドではキューリとかニンジンをかじりしながら、一日を、ほぼ、十円位で過ごしながら凌いでいたとの話だった。

私の場合にも日本からの出国時には、普通の日本人の精々、数日分程度であるう五万円のみを持ち出しであり、それで、二か月半位に及び放浪なので、ほぼ、無銭旅行と云って良い様なものであり、他をどういふ言えないのだが、まあ、汗をかいた日にはコースでのシャワーくらいは浴びて、着替えも心掛けてはいるつもりではある。

随分な強者もいるものだなとは驚かされたものだった。

それにしても、どうやって、東南アジアから、この欧州までを移動出来たのだろうか…。また、この後には、どうするつもりだろうか、多少は気になったものだった。

夜、二十二時半の「コペンハーゲン行は余りに、混雑がひどかったので見送り、次の二十三時五十六分発の列車に乗ることになった。

六人掛けのボックス内では、偶然、三人連れの日本人との同室だったので、何と、五人中の四人が日本人客と云う日本人ラッシュの奇遇ではあった。

(八月十九日、日「コペンハーゲン」)

朝、六時四十五分の定刻に「コペン」到着であった。

早速に、残っていた三十マルクをクローネに両替する。

市庁舎前広場からのスタートで、繁華街の通りを経て、クリスチャンスポー城、コンゲンス・ニューター広場、人魚姫像、アマリエンボー城、ローゼンボー城などを、ほぼ一日散策して周る。ヘルシンガーのクロンボー城にも足を運んでみたかった処だが、夕刻になり、これからでは少々遅いだろうかと思つたので、今日での見学を諦めて中央駅に舞い戻つて来た。

加えて、今日は、あいにくの日曜日でもあり、殆どの商店が閉まつており、コペンの雰囲気は十分には味わえなかった様な気もするので、出来れば、もう一度、再び、北欧から南下して戻つて来た際に立ち寄ることにした。

取りあえずは、今夜の二十一時五十五分発の夜行ではフレゼリクスハウン行に乗り、明日朝には途中のオーフスカ、それとも、終着のフレゼリクスハウンで下車してみようかと思つた。

(八月二十日、月 オーフスカからフレゼリクスハウンへ)

寝覚めが悪ければ、そのままに終点のフレゼリクスハウンまで乗つていようかとは思つていたのだが、オーフスカの近くまで来たところまで、たまたま目が覚めた。

まだ、早朝の六時半と云つ到着ではあつたが、取りあえず、軽い気持ちで下車してみることがした。

街へ出るには、まだ早すぎる時間帯なので、駅舎内のベンチでは暫くの時間調整の休息を取り、八時を過ぎた処で街中へ出てみることにした。

約一時間半ぐらゐの街中散策のあとには、市内で一番の観光名所と思われるオールドタウンを見学した。

大きな都市ではないので、ほぼ午前中には市内のあちこちとオールドタウンの見学も終わり、再び駅に舞い戻つた。

さて、案内所では、次のフレゼリクスハウン行の列車時刻を訊いた処、

「本日の便は終了しました。次の便は明日朝の九時五十分になります」
とのこと。

「え〜〜〜！ そんなあ、馬鹿な・・・」

まだ、お昼を少々回つただけの時間帯なのに、それは無いだろう・・・と思つた。

何とも納得いかない気がしたので、再度、今度は制服姿のホームの駅員さんに訊いてみた。「次は、午後三時過ぎの便になります」との由。

一体、どうなつてるのか？ この案内所の案内は？ と、やや、不可解な気がしたものだつた。少々のモヤモヤ感はあるものの、何はともあれ、無事に三時過ぎの列車には乗ることが出来た。

約二時間程の所要で、終着駅のフレゼリクスハウンへの到着は夕刻の五時過ぎであつた。

取りあえず、ここからは船便でノルウェーのオスロに向かいたいものと思ひ、窓口で時刻を訊いた処、オスロ便は夜の十時になるとのこと。

凡そ、五時間近くの間調整と云うことになるので退屈ではあるが仕方ない。

待合室では何もすることがないのだから、只、ひたすらに人生の貴重な時間を浪費しながら時間を潰すだけのことである。

さて、漸く出発の時刻も近づいたので、改札を入ろうとしたところ、

「所持されているシールパスではオスロ便には乗船できません」と

ゆひひと声……。 (汗) 。 そんな……。 (涙)

一瞬、冷や汗ものものトトラブルではあったのだが、たまたま、ほぼ、同じ時間帯でのスエーデンのイエーテボリ行があり、

「そちらでなら使えますよ」との田。

慌てて、そちらの便へと駆け付け、出港と、ほぼ同時での駆け込み乗船であった。

あわや、棧橋からの離岸では股裂きの計にも遭いそうなタイミングではあった。(ふあゝゝっ、やれやれ……。) 。 もしここで、船からの足を踏み外してもいければ、無事な生還も何処へやらだったかも知れないだろうが、まあ、結果が良ければ全てよし、と云うことにしてよい。(。)

これで、オスロからスカンジナビア半島をベルゲン、ナルビクへと北上して時計回りでストックホルムに舞い戻って来ようかとの思惑は、結局、スエーデンのストックホルムからの反時計回りコースでの北上するということになった。

もとより、予定と云うほどの予定や計画性はないのだから、所詮、どちら周りでも良いのだが、ともあれ、無銭旅行なのだから、有料の追加負担と云うのは本当に困るものだ。

(八月二十一日、イエーテボリ〜ストックホルム)

昨夜には、やや難儀な思いをしたものだったが、イエーテボリへの到着(上陸)は午前一時を少々回った頃だった。

せめて、朝の六時から八時辺りでの到着にして貰いたいものだが、これでは船中でのゆっくろとした睡眠の休息も得られな……。 (猫)

とは云え、私の思惑通りには通用する訳もないのだから致し方ない。

そこいらのベンチでの半野宿で朝を迎えるしかないだろう。

まだ、八月内だから良い様なものの、十月頃とか以降の時節であれば、それなりの防寒用寝袋の用意でもない限り、朝方には低体温症に陥ったり、はたまた、目覚めた時にはこの世の世界ではないのかも知れない。

イエーテボリからは八時過ぎの列車に乗り、一路ストックホルムへと到着したのはお昼過ぎの時間帯だった。

コインロッカーに荷物を預けてからストックホルムの街中を散策する。

夕方には駅に戻り、この後の列車ダイヤを見ながら、北極圏のナルビク行に乗ることにし

た。

スウェーデンの首都ストックホルムからノルウェーのほぼ最北端ナルビク迄は、約千四百キロの行程であり、特急列車で約二十時間余りの長旅となる。

時刻表を見渡している時に、たまたま、同年代日本人旅行者の遠藤君と目が合い、知り合ったので、旅は道連れ世は情けと云うことで、暫くの連れ合い行動となった。

アムステルダム以降での久々の日本語会話の列車旅となった。

暫くして、検札の車掌が前方のドアを開けて入って来た。

入口側から順番に切符の確認をしながら我々の部屋席まで来ると、先ず、私のパス券を確認した後には彼の券を確認した。

乗車室は二等車面であり、彼のパス券は一等車面の利用券だった。

「こちらは二等車面になりますが、貴方のパス券は一等車券なので一等車面の方をご利用できますよ。案内しましょうか？」

「いえ。連れ合いの方が二等車券なので、別に、こちらで結構です」

「それでは、お二人で一等車面の方へどうぞ。」案内しますよ」

と促されたので一等車面へと移動した。

やはり、日本人旅行者の場合には、殆どの場合は、ある程度裕福な人が殆どで、私の様な普通に国内での山登りだけでも出掛ける様な井手達の貧乏旅行者と云うのは、殆ど滅多には存在しないのが現実ではある。

なので、やはり、日本人旅行者の場合には、列車では一等車、宿泊ではホテル利用と云うのが殆どのことなのだろう。

そう言えば、これ迄の道中において見掛けた日本人旅行者と云うのは必ずと云って良い程に、スマートなスーツケースを引いているのが殆どであり、私の様にその辺の山にでも出掛ける様な貧乏くさいリュックを背負っての旅行者と云うのはこれ迄にも見掛けなかったものだった。

それにしても、日本の場合では、先ずは、規則やら規律と云うのが先に立つので、まさかの車掌判断で、「一等車切符の所持で、」お二人で「一等車の方へどうぞ」と云う様な粋な計らいと云うのは、仮に今回の様に「一等車面が十分に空いていたとしてもあり得ないことだろう。」

スウェーデン国鉄のサービス精神と云うのか、粋な配慮には驚いたものだった。

（八月二十二日、水 北極圏ナルビク）

列車内での車中泊で一夜を明かして、北極圏のナルビクへの到着は翌二十一日午後だった。人口、約一万八千人位の小さな町であるが、周辺の標高一五〇〇メートルクラスの山々には夏でも雪が残る

列車から外へ出た途端に、先ず、驚いたのは、ヒンヤリとした肌寒感さだった。

否、肌寒さなど云うのを既に通り越しているだろう。

空はどんよりとして重々しそうな雲行きであり、何やら、白いものがチラリホラリと少し舞っている様でもある。

十日頃へくらの前の真夏の様な残暑のバリからの変化では、東京から稚内を通り越して、いきなり樺太辺り迄にでも北上した様な気候差だろうか。

元より、七、九月の夏旅行での想定ではあったので、肌着のランニングシャツの上には、長そでシャツ一枚と山登り風のベスト一枚と云っただけの軽装である。

ジャンバーの様な上着や防寒衣装は用意が無かったので、スウェット耳元をかすめた風のヒンヤリ感には、さすがに北極圏だなと、思わず、ブルッと来たものだった。

アバウトな体感ではあるのだが、外気温の方はと云うと、多分に、摂氏五、六度前後くらいのものだろうか。

日本であれば、地域にもよるが、概ね、東京辺りでの十一月の中旬か中旬辺りの季節感だろうかとも思える。

ともあれ、周りを見渡しても、私が一番の薄着者であり、計画性の無さなど云うのを露呈している様なものであり、何事も、みっちり事前での綿密な計画を立ててからの行動者からすれば、何と云う、アホだろうかと思われてしまいうような軽装には違いない。

口ひたすら「、早足で真つす、一路コースホステルへと目指す。
コースに到着すると、無論、ストーブが炊かれており、一段落で落ち着いた。

真夏の暑さのバリからでは、まだ、僅か、十日間へくらの経過でしかないのだが、今日のカレンダー上での八月二十三日の頃と云えば、日本では、まだ、お盆過ぎの残暑厳しい時節である。それが、いきなり、東京辺りでの初冬にジャンピングした様な北極圏の風を味わえただけでも、それはそれなりの意義はあった様な気がしないものでもない。

どんよりした空模様だったこともあり、何となく、寂しい所まで来たものだとも云う印象でもあった。

北欧の人たちが夏の天気の良い日に公園の芝生みたいな所で日光浴を楽しんでいる様な光景と云うのは、雑誌のグラビア写真の様な処でいつかは見掛けた様なものだが、それも理解出来るような処だろう。

（八月二十三日、木 ナルビク〜オスロへ）

翌日には市内を散策した後には高台に上り、フィヨルドの港一帯を見渡した。

ノルウェーの西岸は殆どがフィヨルドによる複雑に入り組んだ海岸線であり、このナルビクの港もフィヨルド見学クルーズ船の北方拠点なのだろう。

ともあれ、今夜の夜行ではオスロに向かうことにした。

(八月二十四日、金 オスロ)

オスロに到着したのは翌朝の八時前だった。

中央駅に到着すると、荷物類をロッカーに預けてからの市内観光とした。

夕方には市内の公園で二人連れの日本人女性との出会いがあった。

翌日にはベルゲンに向かいたいと云うので希望日程が合い、ストックホルムからナルビク、オスロと、これ迄の行動を共にしていた遠藤君を含めた四人での合流となり、夜二十二時半過ぎのオスロ発でベルゲンに向かうことにした。

(八月二十五日、土 ベルゲン)

翌朝、外が明るくなって来るに連れ、車窓に流れ行くフィヨルドの風景は生まれて初めて目にする新鮮なものであり、大規模なスケール感といい、旅の醍醐味でもあった。

ベルゲンへの到着は丁度、午前八時頃であった。

一昨日のナルビクとは打って変わっての好天気に恵まれた。

昨夕にオスロ市内の公園で知り合い合流した二人の日本人女性と遠藤君との四人での行動となり、まずは、山の中腹までのケーブルカーに乗り、同中腹の駅からは徒歩での山頂を目指すことにした。

途中では何度かの休息を取りながら、写真を撮ったり、ハミリフィルムを回したりしながら、漸く、山頂に辿り着いたのは丁度お昼頃の時間帯だった。

山頂から見下ろすベルゲンの街並みや四方に広がる複雑に入り組んだフィヨルドの光景はまさに見事な自然の景観であり、目に新鮮だった。

時間の猶予と絵心でもあるならば、のんびりとスケッチでも描いてみたいところだろう。山頂では持参のパンと飲み物での昼食を摂り、暫くの休憩を取る。

さて、明日の日程をどうしようかと四人で話し合っていたのだが、彼ら三人においては、今夜はこのベルゲンのユースに一泊して、明日にはフィヨルド巡りの遊覧船にでも乗ってみたいとの意見ではあったが、私においては、懐奥の寂しさもあつての迷い心ではあった。

どうしたものかとの戸惑いながらも、取りあえず、彼らと一緒にユース迄は足を運んで見ただけだった。

その途上でのケーブルカー終点駅付近からでは、空をオレンジ色に染めながら、刻一刻と色彩の変化が著しい中での北大西洋の彼方に沈んでゆく夕日の雄大な光景はまさに鮮やかなものであり、絶景だった。これがベルゲン観光の最大の魅力のひとつだろう。

結局のところ、私においては、宿泊費を節約としての夜行列車を利用することにしたので、夜九時過ぎた処で彼ら三人とも別れを告げて、一人、下山することにした。

後にして思えば、やはり、彼らと一緒にフィヨルド巡りの遊覧船にでも乗っていた方が楽し

くて良い思い出にもなったことだろうかとの後悔の念はややあったものだった。

下山途中の山道では殆ど照明がないので、ほぼ、真っ暗闇の様な中で、正直な所、心細い様な怖さはあったものだが、只、途中から見下ろすベルゲンの夜景は心に染み入る程に素晴らしかったのがせめての慰みだった。

やがて、駅まで無事に辿り着き、二十時半ベルゲン発のオスロ行夜行に乗ることにした。

(八月二十六日、日 オスロ→ストックホルムへ)

昨夜のベルゲンからの夜行では車中の暖房が十分に効いてなかった為に夜通し寒い思いをしたものだった。

加えて、普通の直角座席では勝手に横になって寛べと云う訳にも行かないので、余り、質の良い睡眠が得られないままに、午前七時二十分にオスロ中央駅に到着した。

まずは、ハミリフィルムと写真のカメラ以外の殆どの荷物をコインロッカーに預けてからの市内巡りとした。

若干の寝不足感ではあるのだが、何処かの適当な公園でもあったら少し昼寝でもしたいものとの思惑でもあるのだが、まずは、王宮に行き着いたので、少し写真を撮ったり、ハミリカメラを回していた処、ベンチに掛けていた二人連れの老人からひと声があった。

「オスロの一番の名所と云えば、フログネル公園がお勧めだよ」。

ここからでは徒歩で十五分から二十分くらいなのだと云うので、この後には、そちらに向かつてみることにした。

フログネル公園の庭園内では、沢山の彫刻がバランス良く配置されていて、噴水や色とりどりのバラの花に彩られ、広々とした綺麗な公園だった。

ここでも、写真やハミリフィルムを回しながら散策して周り、その後のお昼頃から午後三時半くらいまでは芝生の上での昼寝とした。

夢見心地の休息を得たので、昨夜来の寝不足感も幾らかは解消された様だ。

夕暮れ時近くになって来ると初秋の肌寒さの公園では殆ど人氣がなくなり、目覚めた後にも暫くはベンチでポットといていたのだが、その後には奇跡的なサプライズとでも云うのか、ちよつとしたハプニングがあった。

そよ風があり、風上の方からは一枚の紙片がサササッ……とめくれる様に風に煽られながら、私の足元直ぐの届く所までに近づいて来た。

すかさず、足で踏ん付けてキャッチしたのだが、手にすると、只の紙切れではなくて、ノルウェー・クローネ紙幣だったのだ。

我ながら信じられない様な、まるで漫画の「」の様な奇跡の出来事であったが、やや、滑稽さも込み上げて来たものだった。

頭の中での概換算では、確か、約五千円相当に近かった様な記憶ではあったが、額面が百ク

ローネ札だったのか二百ワローネ札だったのかまで定かでない。

日本の様に近くの交番という様なものは無さそうだが、そもそも、殆ど人影もない夕闇迫る広々とした公園での裸のお札一枚だけが、たまたま風にあおられながら私の足元まで運ばれて来たのだから、落とし主の連絡先情報などがある訳でもない。

然るべく、何処かに届けた処でも、余り意味のないことだろうかとはいえるので、まさか、これは天からのお恵みなり、助け舟だろうかと天に感謝したい心境ではあった。

ともあれ、これで数日の食費の足しにはなるだろうかと・・・。

さて、オスロ駅に戻り、二十二時二十五分発の夜行では再びのストックホルムに向かうことにした。

(八月二十七日、月 ストックホルム)

翌朝の七時半にはストックホルム中央駅に再び舞い戻って来た。

到着後には、早速リュック等の荷物をロッカーに預け入れて、八ミリフィルムと写真のカメラに食料袋を携えての市内見物とした。

ストックホルムについての事前での準備や予備知識などは特にないので、只、気の向くまま、足の向くままに歩き周るのだが、午後には市内の歴史博物館に入ってみた。

この処の車中泊の連投と昨夜来の寝不足からの疲労感もややあり、館内のベンチに腰かけた際には、そのままに一時間くらいを眠りこけて過ごしたので、同館内の全体までは見学しないままに外に出ることにした。

ストックホルムの街全体の理解としては、やはり、何処かの小高い所にも登ってからの一望に眺めるのが良かったのかも知れない。

日頃からのエネルギー補充としては、余り、大した良いモノを食してなくて、夜の八時頃までの一日中を歩き回っているのだから疲労感もそれなりには蓄積していたものだった。

日本国内での旅であれば、せめてもの温泉にでも浸って疲れを癒したい処だろう。

ストックホルムからのスタートとゴールでスカンジナビア半島を反時計回りにはば一周して来たものだが、今夜の夜行では再びのデンマークの首都「コペンハーゲン」と舞い戻ることにした。

(八月二十八日、火 再びの「コペンハーゲン」)

午前七時半の「コペンハーゲン」再到着であった。

九日前の機会には、どんよりして肌寒い天気だったのだが、前回とは打って変わったの好天気に恵まれた。暖かくて最適な観光日和である。

早速、スエーデン紙幣の五十クローネをデンマーク・クローネに両替して六十四・五五クローネだった。

両替のあとには、重い荷物をロッカーに預けてからの市内巡りとした。

まずは、コペンハーゲンの中央駅から北へ約五十キロ、電車で約一時間半のヘルシンガー駅に向かい、そこからクロンボー城までは徒歩で約十分程度のものである。

マップ上での同城の位置的な確認をする、首都コペンハーゲンを有するシエラン島の北東部において、海峡に向かって突き出た様な形の先端の位置にある。

対岸スエーデンのヘルシングボリ迄の距離は、概ね、三キロと少々位のものだろうかと思われる。

事前での予備知識は無かったのだが、或いは、昔の戦争の盛んだった時代においては、この狭い海峡を挟んでの大砲の打ち合いをも演じていたことだろうかとの妄想が湧いてくる。

それ程に狭い海峡のだが、ロシアのバルチック艦隊にしても、バルト海の自軍の基地から北海、或いは大西洋に出ようとするには、この、概ね三キロくらいの狭い海峡を通過するか、または、シエラン島反対側の大ベルト海峡を通過するしかないのだ。

マップ上での確認をする程に、大国ロシアの大艦隊と云えども、北海、大西洋の大海原に出るには、他人様の庭先の様な、この東西の狭い海峡の何れかを通過させてもらう以外にはないのだ。

黒海艦隊にしても似た様なもので、トルコ国内の二箇所狭い海峡を通過させて貰い、さらに南下してはギリシアとトルコ間の狭い海峡を通過しなければ地中海までにも出る事が出来ない。

大西洋まで出るとしたら、さらに、その先にもスペインとモロッコ間の狭い海峡を抜けなければならぬのだから、海軍増強志向の発想上では、しからは、東洋の日本の北方領土諸島の獲得を、と日米戦終結のどき々々を狙って雪崩れ込んだのは、論理的、心理的な理屈としては理解出来ないものではない。

さて、余談の方が長くなってしまったのだが、ほぼ半日の午前中をクロンボー城内での観光で過ごしたものだ。

持ち合わせの少ない八ミリフィルムを大分、消耗してしまった。

午後には再びコペンに戻り、市内を見物して回る。

今夜の夜行ではドイツのフランクフルトケルンにでも向かおうとは思っているのだが、それまでの時間を持て余すので、チボリ公園での時間を過ごし、夜の街も散策してみることにした。

夜の街のあちこちの書店頭では、日本国内では想像がつかない程に過激で露骨な写真雑誌がこれでもかと云う程に積み重ねられ、溢れていた。

ハンブルクも凄かったけど、こちらコペンの方でも負けてはいないようだ。

誰へのお土産にと云う宛でもないが、予算も少ないので、小ぶりで薄目の雑誌の二冊とランプを購入。

入国時に税関でのチェックに引つかかれば、即、「これは持ち込めないのだから置いていきなさい」と云う成行で、税関職員へのお土産になってしまうのだが、まさか、いちいち登山用のリュックを紐解いて開けてまで、そんな面倒なことはいないだろう。。。

帰国後には、周りの友人知人たちへの回覧では、随分、喜ばれ歓迎されたものだった。

バイト先でお世話になっていた六十代後半くらいの白髪の上司には、「是非、持って来て見せる！ 貸してくれー」とかの強い要請もあり提供した処、仕事の休憩中には紙面に食い入るように熱心に鑑賞されていて、「是非、売ってくれー」とか懇願されたものだった。

その当時の日本では入手も困難な部類の雑誌故に、それなりの希少価値とでも云うのが、国内での潜在需要と云うのは、相当に大きなものがあったことだろう。😓

もし、手荷物程度内での持込に何らの障壁、問題も無く、自由だとしたら、さぞかし、良いお小遣い稼ぎにでもなったものだろうかとの妄想が一瞬、過ぎった様な、無かった様な。。。😓
只、その後の幾度かの引越しの繰返し過程では、それらの土産品も、いつしか、何処かでの引越しゴミの藻屑となり、蒸発し、消え去ってしまったことだろう。

（八月二十九日、水 フランクフルト～マインツ）

前夜遅くの夜行でコペンを発ち、フランクフルト中央駅への到着はお昼を少し過ぎた頃だった。

このところ、やや肌寒い様な日々が続いていたこともあり、汗はかいてないのだが、それにしても、列車内での車中泊が続いたので、そろそろ、ユースに泊まってるシャワーを浴びたい処ではある。

駅構内で知り合った中尾君との合同行動となり、まずは、JALオフィスに向き、市内の観光案内図を買う。

二人でフランクフルト大聖堂、市庁舎、ゲーテハウスなどを見学する。

その後の夕刻、一六時半頃の列車ではお隣のマインツに向かうことにした。

明日はここから出発するライントりの観光船を体験してみようという思い立ちである。
マインツの駅前からはバスに乗り、約一〇分位の所要で、ユースに着いたのは一七時半であった。

夕食は3.5マルク、宿泊が2.5、朝食2.0、及び、シャワーの利用が1マルクでの合計が9マルクであった。

（八月三十日、木 マインツ～ライントり～コブレンツ～ブルージュ）

翌朝を迎えて、八時四十五分発に乗船のつもりで、少々早めにユースを出た。 出発時刻に

は間に合ったのだが、

「二等のユーレイルバスでは当便には乗れません。次の十時発の便でしたら大丈夫ですよ」
とのことだった。🐱

二等のレイルバスでは、時々、こう云う場面に遭遇することがある。🐱

ここではスエーデン国鉄の様にはいかなかったが致し方ない。
次の便を待つことにした。

このコブレンツからのライン下りも、或いは、人生上での最初で最後の機会になるのかも知れないだろうが、あいにくの空模様と云うのか、昨日のフランクフルト到着以来のどんよりした天気であり、いつ、雨が振り出すかも知れない様な雲行きである。

ともあれ、ユースでの出逢いから一緒に行動することになった沢村君と共に八時四十五分の船を見送り、次の十時の便に乗ることにした。

中尾君とはここで別れとなった。

「暇だから見送るヤ」

と云って、船の出発を見送っていった。

マインツから終点のコブレンツまでは、たっぶり、約五時間半の船旅であった。

コブレンツ近くまで来た頃には、遂には小雨が降り出していた。😞

下船後には、小雨の中を約三十分くらい歩いてコブレンツの駅に辿り着いた。

コブレンツからは十七時過ぎの列車に乗り、ベルギーのブルージュ>と向かうことにした。

ブルージュ>への到着は、当初見込みを大幅に遅れての二十二時過ぎであった。

かなりの夜遅の時間帯になってしまったが、ユース迄の道を途中で何度か尋ねながら、漸く辿り着いたのは二十三時過ぎであった。

余りに遅すぎる時間帯になってしまったので、果たして、チェックインが出来るだろうかとの心配もあり、恐縮ではあったが、それでも何とか、すんなりとチェックインを受け入れてくれたものだった。

ルールや規律のシビアな日本であれば、絶対に受け容れては貰えなかったことだろう。

(八月三十一日、金 ブルージュ>ルクセンブルク)

前夜のユース到着が余りに遅い時間帯だったので、ロ、シャワーを浴びて寝るだけではあったが、今日は八月も最終日の三十一日。

前日に比しては、大分、マシな天気となった。

チェックアウトタイムの午前十時過ぎには玄関が閉まるので、ともあれ、沢村君と共に、チェックアウトを済ませた上で、リュックの重い荷物は前庭の原っぱの木の下に置いてから街中への見物に出かけることにした。

事前での予備知識も何もありません。初めて訪れたブルージュではあったが、まるで、街全体の風景そのものが童話の世界から飛び出した様な美しい佇まいであり、中世の歴史の重みをも感じさせられる趣がある。

北のヴェネツィアと呼ばれる別称も有るそうなので、縦横に流れる運河と水の都でもある。

昨夜遅くに到着して以来の好印象としても感じていた処ではあったが、国民性なのだろうか、例えば、街中で、ベンチに座っていた数人の若い女性たちに、ハミリフィルムのカメラを向けると、手を振つての笑顔と愛想の良さが溢れていた姿は、私の様な一人旅の者に対しても、何となくの友好的なムードが感じられたものだった。

沢村君の方は、この後、早めにハーグに向かいたいというので、午後には彼とも別れて、さらにその一時間位の後に、ユースの前庭に置いていたリュックを引取りに戻ったところ、ここのでちょっとしたハプニングがあった。

庭先に置いていた場所にはリュックが無かったのだ。

そして、そこには、日本語で書かれたメッセージの紙片が木の枝に差してあった。

「稲山さんともう一名の方へ。荷物を置き去りにして遊びに出かけては駄目ですよ。荷物が見当たらないでビックリされたでしょう。ユースの玄関内に置いてあります」と。

一時は冷や汗ものではあったが、十七時のオープン迄を待つことになり、荷物の心配をしてユースの玄関内に確保しておいてくださったスタッフの方にもお会いした。

また、この待ち時間の間に知り合ったアメリカ人青年と一緒に夕方からのブルージュの街中を見学して回ることにした。

夕闇の中での灯りが点灯し始めると、街の全体が灯りの中に幻想的に浮かび上がってくるので昼間とはさらに趣の異なった美しさと雰囲気が出される。

さて、街中での行動を共にしていたアメリカ人青年とも別れて、次には取敢えず、ルクセンブルクに向かうことにした。

只、ブルージュを発つのが遅くなり過ぎたことで、ルクセンブルクへの到着は二十二時四十分となっていました。

夕方の到着であればユースを利用したかった処だが、これから探すには時間帯が遅くなり過ぎたので、諦めて、駅構内待合室のベンチでの夜明かしとした。

（九月一日、ルクセンブルク〜コブレンツ〜フランクフルト）

固いベンチの上では、余り熟睡も得られないままに翌朝を迎えたものだった。

ルクセンブルクについては、特に、事前からの知識や関心を持ち合わせていたものでもない

ので、適当な便があれば何処か他への移動をと云う思惑でもあったが、程良いタイミングでの便が見当たらなかったので、足の向くままに街へと繰り出してみた。

そして、アドルフ大橋の付近まで来たところでは、初めて、その素晴らしい景観を目の当たりにしたものだ。

同大橋の幾何学的な建造美と、芸術的な美しさと云うのは感動的なものであり、また、その橋の上からの展望と云うのも素晴らしいものだった。

つい、想定していた以上に時間を過ぎてしまったのだが、十一時五十六分発の列車では、ライン下り時に下船したコブレンツまで再度、向かうことにした。

一路、コブレンツに向かう車窓に流れるモーゼル川沿いの風景は、まるで絵画に描かれたような趣があり、素晴らしかった。

只、私自身においては、昨夜来の睡眠不足から、意識の朦朧とした眠気もあり、いつしか、うつうつとしていたものだった。

コブレンツからは、ライン川沿いに遡り、再びのフランクフルトへと到着したのが十九時過ぎであった。

ここでは夕食を取り、この後の二十二時五十一分発のウィーン往きに乗ることにした。

（九月二日、日 ウィーン 初日）

フランクフルトからの夜行でウィーンへの到着は早朝の七時二十分であった。

夜来の列車内では暖房が十分ではなかったために、寒さの中では余り安眠が得られなかった。

やはり、二等車内と云うのはこんなものだろうか。。。😓

到着の早々からではあるが、まずは、コースを探してみ、取りあえずは、荷を下ろしてからの街見学にしようとの算段である。

コースを探し歩くのには、少々の時間もかかり、苦勞も伴ったが、午前十時半にはヒュッテルドルフのコースに到着した。早速、リュックの荷を下ろして預け、街に出ることにした。

たまたまの日曜日であったために、街中の商店の殆どは閉まっているので静かなものだった。

土地勘も無いので、適当に足の向くままに、あちこちを夕方までを歩き周り、ブルクガルテン(王宮)庭園、ヘルデンプラッツ(英雄)広場、市庁舎などを見学して周り、午後七時過ぎにはコースに戻って来た。

流石に、芸術の都ウィーンと云った処だろう。見事な建築美を誇る様な建物がずらりと並んでいる光景には圧倒される印象である。

明日の一日で市内の全体を見学して周るには時間的にも少々厳しいのかも知れないが、今宵のコースは設備も良くて綺麗なので、久しぶりに快適な眠りには付けぬことだろう。

（九月三日、月 ウィーン 二日目）

コースでの朝食のあと、九時半頃には荷物をコースに預けたままに街への見学に出る。

西駅に着き、市内観光地図を見ながら、名所巡りの下調べをしているところで静岡出身と関西出身の二人の日本人との出逢いがあったので、一緒に市内観光で周ろうかという話になり、三人でシエーンブルン宮殿の見物にと出かけた。

シエーンブルン宮殿では、その幾何学的なデザインの庭園美と云い、広さと云い、また、建物内も芸術品の宝庫みたいなものであり、素晴らしかった。

三人で行動しているの途中では関西の人とは逸れてしまったので、後半では二人での行動となり、ほぼ、一日中を費やしたものだ。

出来れば、続いている他の名所についても周りたいのだが、実は、何かのふとした弾みで、スラックスの股が裂けて破れると云う、何とも示しの付かない様な思わぬトラブルがあった。

このままでの散策の継続には抵抗感があるので、仕方なく、今日の処はシエーンブルン宮殿だけの観光と云うことで、早めに切り上げて、コースに引き返すことにした。

極力、人目には気付かれないようにと、気遣いながらの帰路の途中では市内電車を乗り間違えたこともあり、余分な費用と時間のロスにもなったが、夕方の六時頃には何とか無事にコースに戻り着いた。

(九月四日、火 ウィーン三日までのトラブル)

朝のチェックアウトの後には、昨日来での統一行動の漆畑君と一緒に聖シュテファン大聖堂を見学する。

建物全景としても芸術品と云える程の素晴らしいもののだが、中に入ると華麗な絵画や彫刻、ステンドグラス等々、中世の荘厳な雰囲気を感じていく。

ほぼ一日の見学の後には、近くの商店でパンと飲み物等の食料品を買い、公園のベンチでの夕食とした。

何しろ、重いリュックに加えてハミリカメラもケース入りで抱えているので、長時間の歩き周りや云うのは両肩にも食い込み、相当に疲労が溜まっているのは否めない。

ヨハンシュトラウスの銅像のある公園では夜のコンサートがあると云うので、旅の記念にそれを鑑賞してみようとは思いつながら、夕暮れ時のベンチでの休憩時には少々うとうとしていたものだった。

さて、暫くのベンチでの休息の後、公園の会場に入った際には思わぬトラブルの発生があった。

それ迄はずっと肩に掛けていたハミリフィルムカメラのバッグを先刻のベンチに置き忘れてしまったことに気付いたのだ。

そもそも、念願のこの旅行に備えての用意としていた大切なカメラであり、僅か五〜一〇分程度ぐらひで引き返したのに、既に無くなっていたのは大変なショックであり、慌てて近くの

警察署に駆け込んだものだった。

警察署では、なかなか英語の通じる番員が居なかったもので、身振り手振りも交えながらの意志疎通とやり取りは容易ではなかったが、「おそろしく出て来るのは難しいだろう」という様な話内容のニュースではあった。

貧乏な旅ながらも、唯一の警沢とでも云うか、旅行の記録途上での紛失という大きな痛手とショックであり、落胆したのもだった。

「じつなると、「」ンサーターの鑑賞と「」らではなくなったので、「」二二時間を経過した後の、夜九時頃には再び警察署に足を運んでみた。

「まだ、届いてないでしょうか」

「届け出がありましたよ」。

どいやら、近くに住んでおられるドクター・バオムさんと云う方が拾って預かっておられるから、明日の午前中に訪問してみなさいと云う話で、その方の名前と住所を書いたメモ紙を頂いた。

日本の警察での遺失物の預かりとは手順も色々違う様だが、ともあれ、手元に戻りそうな見通しとなったので、ホッとして胸を撫で下ろしたのもだった。

一緒に行動していた漆畑君にもかなりの動揺と心配を掛けてしまったが、一件落着の見通しが出来たことで、彼も安心して帰れたものだった。

一緒に西駅まで歩いて行き、夜の十時過ぎには彼とも駅で別れた。

本来ならば、「」こからの夜行列車に乗り、何処かへの移動をと云った処だったが、何しろ、既に、シリリングを使い果たしてしまい、夜遅を迎えてしまったので、どいしたものと…。

仕方ないので、前々夜、前夜とお世話になったピュニルドルフのコースまで引き返しては来たものの、裏山の木の下の野宿とした。

(九月五日、水 ウィーン 四日田)

翌朝には、なるべく目立たない内にと早めの六時過ぎには起床して退散して来たものだった。

少々早すぎる時間帯なので、西駅では幾らかの時間潰しをした後で、早速、前夜に警察から教えてもらったドクター・バオム氏のオフィスへと向かうことにした。

オフィスに着くと、ドクター・バオム氏は、まだ出社されてなかったが、少しだけ英語の通じると云うご婦人が対応されたものの、なかなか話は通じ難い。

「」二二か所に電話を掛けては頂いたものの、話の内容までは不明ながら、なかなか話の要領を得てない様な気配ではあった。

昨夕に、私が届け出た警察署を示して、そこに行つて、もし、無かつたら、四日後に中央駅の落し物収集所に行つてみなさいとの由。

そもそも、同警察署では「ドクター・バオム氏が預かっているから、明日の午前中に、そこへ行きなさい」と云われて来たのに、話のすれ違いがある様で、なかなか、通じない様だった。仕方がない。進展しそうなでもないのでも、もう一度、昨夕の警察署に向かうことにした。再訪した警察署では、

「もう一度、ドクター・バオム氏の所へ行ってみなさい。多分、手掛かりがあるでしょう。今すぐに、電話を入れておきますから」

と云うことで、再度、同氏のオフィスを訪問した。

漸く、話を通じて、ドクター・バオム氏にもお会いして愛機を再び手にすることが出来た。

丁重にお礼を告げて事務所を後にし、かくしての不幸中の幸いであった。

午前中には日本の知人友人への絵葉書を書いたり、街中を少々撮影してみたりした後に、ウィーン大学へも立ち寄ってみた。

大学構内ではイギリスのロンドンからドイツ語の夏期講習への参加で来ているという学生と知り合い、一時間半位は彼と二人で話し合い過ぎていたのだが、リュックではコーラを審つてくれた。

彼と別れた後には、再び、ブラブラと歩き周りながら西駅へと辿り着いた。

この処では連日の好天気が続いており、今日も雲一つ見当たらない快晴で、また、久しぶりに蒸し暑い一日であった。

今夜には、二十二時三十五分か零時十五分弁の夜行でミュンヘンカインスブルク方面へでも向かおうかと云った処である。

（九月六日、木 ミュンヘン初日）

列車は翌朝、七時六分の定刻にミュンヘン到着であった。

まずは、ユースまでを案内図で確認してみると、徒歩では少々遠い様な気はしたが、まだ、朝の元気なうちなので頑張つて歩くことにした。

ユースに到着して手続きを済ませると、まずはロッカーに荷物を預けてからの街見学とした。

街の案内図やガイドブックなりの参考資料は持ち合わせなかったので、適当に、足の向くままにあちこちを一日中歩き回り、通り掛かりではミュンヘン大学にも立ち寄ってみた。

広々とした大学構内キャンパスの素晴らしさや充実ぶりには羨ましい様な気がしたものだ。だった。

夜になり、そろそろユースに戻ろうとしていた矢先ではあったが、途中で知り合った日本人の若者からの誘いがあり、再び一緒に街中へとウターンして繰り出した。

ミュンヘン市内では有名な大衆酒場のホフブローイハウス、国営ビアホールである。

ピアホールが国営と云うのも、日本ではピンと来ない様な話だとは思っただが、ともあれ、五百年近くも続いているお店と云うことだろう。

一步、中に入ると、「フッ」という球場の歓声の様な全体的な盛り上がり雰囲気があった。それに乗じて大いに気を良くしている群衆の中では、ドイツ人気質と云うのが伝わって来る様な気がしたものだ。

見渡しの範囲では、日本人客も十人近くは見受けられる様だった。


(この時代では東洋人と云えば、殆どは日本人だけの様なものだった)
演奏の中では日本の曲も二曲を演奏してくれた。

(九月七日、金 ミュンヘン(旧田))

さて、翌朝には、一つの残念なことがあった。

前夜には、周囲の皆と同様に、ユースの共同洗面所ではシャツを洗濯してハンガーに掛けていたのだが、朝になってみると、新調だった私のシャツだけは誰かに盗まれて無くなっていたのだ。

日本を出立の前に、知人からの饞別にして貰っていたもので、この道中ではライン下りの日に着用していただけの、殆ど、まだ新品のシャツだった。

日本のユースであれば考えられない様な、あり得ないこととは思っただが、残念だった。
世界中からの若者が集まっているので、日本での常識や感覚と云うのが必ずしも通用しないこと云う点では悪い面での一例だろう。


翌朝には午前九時にユースを出て、ひと先ずは駅のコインロッカーに荷物を預けてから街へ繰り出すことにした。

近くのスーパーでパンとミルクを買い、市電に乗ってニンフェンブルク宮殿へと向かう。

様々なルネッサンス様式の建築や建築美術には、もはや飽きる程にも接して来たので、特段の期待を持ち合わせていた訳でもなかったのだが、いざ、現地に着いてみると、そのスケールの大きさや遠くから眺めてのバランスの取れた美しさと云い、流石に素晴らしいものだった。

ロバ、ロバに来て初めての体調の不調に見舞われることになった。

朝に買って持ち歩きながら飲んでいたミルクは少々、劣化していたのか、否、持ち歩いている内に劣化してしまったのかも知れないが、それとも飲み過ぎたのか……。

 すっかり、腹の調子がおかしくなってしまう、腹痛と下痢気味に見舞われてしまったのだ……。

それでも何とか耐え忍び、少しづつでも歩き回りながら、夕方には再びのホフブローイ酒場へと繰り出した。場の雰囲気はハミフィルムに収めるためである。

さて、今夜の夜行では、これから何処へ向かおうかと云った処である……。

出来れば、スイス方面へ向かってみよつかとの思い付きはあるものの、只、スイス方面への夜行車中泊では、少々、距離が近過ぎて、睡眠時間には中途半端になりそうなので、丁度良さそうな便が見当たらない処である。

そんなこんなでの迷いどころではあったが、結局は、二十三時過ぎのローマ行きに乗ることにした。

(九月八日、土 水の都ヴェネツィア)

前夜のミュンヘンからの夜行では、途中がどのような経路であったかは認識してないのだが、朝方には、既に、イタリアに入っていた様であり、目覚めて気付いた頃には、間もなくボローニャへの到着と云った処だった。

地図上で確認すると、右上の北東部にはヴェネツィア(ベニス)とある。

どちらかと云うと、水の都ベニスと云うイメージへの関心が湧いて来たので、次のボローニャでは折り返してベニスへと向かうことにした。

只、ルートとしては多少の遠回りになってしまったので、ベニスへの到着は午後一時頃になった。

ウィーンやミュンヘンでも残暑の厳しい中ではあったが、さらに、南下して来たので、駅舎から外に出ると、厳しい真夏の様な暑さとなった。

やはり、この時期の日本の残暑と余り変わりはない様だ。

それにしても、初めて訪れたベニスの街は、これ迄にも欧州の各国、各地での素晴らしい景観や街並みと云うのはあちこちでも目のあたりにして来たものの、ここではまた、これ迄とは格段に趣の異なったスケールの独特の迫力があり、圧倒されたものだった。

昔ながらの童話か絵本の中の風景が動いている様な現実があり、ゴンドラに乗ると、ベニスの空気を満喫した様な気分も味わえた。

夕方には、中心のサンマルコ広場に辿り着いて、少々うろついていた処で、久々に日本語で男性からの声が掛かった。

「日本人の方ですか?」と。

「ええ、そうです」と、感じるのと、なんでも、日本人の社長さんと、その部下の皆さんと、八名くらいでのツアーだった。

私の様なカーキ色の登山用リュックを背にしている様な旅行者と云うのは、確かに、この欧州での期間中に、他には一度も見掛けたことが無いのだが、その当時での日本国内での山に登る人や貧乏旅行者の場合には、殆どがこのスタイルだったので、日本人から見たら、遠くからでもひと目で私が日本人だと云うことは判る様なものだろう。

「一人旅ですか？ それは、素晴らしいなあ。良かったら、その辺で少し休憩して、お話しでもしませんか？ お茶でもどうですか？」

「エッ。それは、嬉しいですねえ。ありがとうございます」
と云うことになり、近くのお店へと誘われたので付いて行く。

勧められるままに、ビールをこ馳走になった。

普段からアルコールは飲めないのだが、折角の「厚意」なので、一杯だけ……と。

そしてこの歓談の中で、はじめての逢って来た道中での行き当たりばつたりの話を訊かれるままに、話しの花が咲いて来たひと時だった。そして、最後には、

「じゃあ、この後も、道中気を付けて頑張ってくださいね」
との激励のお言葉と二十ドルの賤別をくれたのだ。

何と云う奇特な、そして、親切な方、お氣遣いदारうつかと感謝感激であった。

当時のレートでは、一ドルが二四二、三円位の時代だったので、換算すると約五千円近くと云うことになる。無銭旅行者にとっては感慨深い、何とも有難い差し入れだった。

今では、古き良き時代と云った様な処だろ……。

オスロでは、殆ど人気の無かった夕闇迫る公園のベンチでは、約五千円近く相当のワローネ札が風上から音もなく足元に近づいて来たのを、思わず足で踏んつけてキャッチした時の、まるで、漫画の様な奇跡のシーンまでもが再び脳裏に過ぎったものだった。

やはり、天の何処かでは、誰かが私の無銭の旅を見守りつつ、或いは支え、助けてくれているのだろつかと云う感謝の様な気がしないものでもなかった。

暑かったので、夜には市内のユースに泊まり、旅の汗を流すことにした。

（ 九月九日、日 ヴェネツィア〜ミラノ ）

翌日には八時過ぎに起床して、九時過ぎにはユースを出た。

ユースでのカウンターの若い男は余り、愛想の無さそうな男だった。

どうやら、朝の九時迄にはチェックアウトを済ませて欲しいのが、何人もの客が九時を過ぎてもチェックアウトを済ませないでいるのをブツブツ言っている様子だった。

先ずは、水上バスに乗り、対岸の病院のある所まで行き、コレラの予防接種を受けた。

その後には駅を田指して歩いて歩いていたのだが、ベニスベニスの街の裏道となると、まさに、迷路の様な細道であり、普段から、方向感覚においては些かの自信は持ち合わせているつもりだったが、ぐるぐる歩くと歩き回っている内には、大分、遠回りをした様な気がしたものだ。

ともあれ、これまで以上に歩き回って来た国や都市からすると、ベニスでは物価が大分、割安感が出て来た様には思えるので、ホッとしたものだった。

色々と珍しいものも見当たらないので、何某かの記念になるものでも買ってみたいとは思ったのだが、何しろ、背中の荷が重すぎ、これ以上の荷物荷物の追加は苦しい処でもある。

なので、ささやかな記念になりそうな一品と数枚の絵葉書だけの買い物とした。

さて、駅に着いて時刻表を眺めると、休息を兼ねるのに適当そうな列車の便が見当たらないので、仕方なく、ミラノ行の各駅停車に乗ることにした。

(九月十日、月 ミラノ)

ミラノ駅への到着は十九時十分であった。

駅舎を出ると、少々、街を歩き回りながらコースへと歩を進める。

コースへの到着は二十一時であった。

思っていたよりは設備も良くて快適なコースだった。

翌朝、シャワーを浴びた後での、午前九時には、ニーゼーランドの青年と一緒に街に出る。

只、残念なことには、今日はたまたまの月曜日だったが、市内の博物館や美術館、観光名所なども殆どが休館で閉まっていたことだった。

サンタ・マリア・デラ・グラチエ教会にも足を運んでは見たのだが、レオナルド・ダヴィンチの『最後の晩餐』の大作を目にすることも叶わなかった。

その後には、さらに歩き回りながら、ドゥオーモまで辿り着いたところでは、イタリア人から写真の一枚を撮られたので、親切にもサービスしてくれるのだろうかと思ったら、一万リラを請求されたので断った。

危うい一幕ではあったのかも知れないが、ともあれ、頼んでもいないことであり、きっぱり断ると先方でも、それ以上に食い下がっては来ないので実害は無い。

この後にも、二人で足の向くままにあちこちを歩き回っていたのだが、その内にはニーゼーランドの青年とも逸れてしまった。

今夜の夜行ではローマかナポリにでも向かうことになるだろうか…。

(九月十一日、火 ナポリ)

前夜のミラノからの車中では三人のイタリア人学生と地元のおじさんと五人相部屋であった。

早朝の午前六時過ぎには列車がローマ駅に到着したのには気付いては居たのだが、まだ、寝不足気味ではあったので、そのままにナポリへと向かうことにした。

午前八時前には今回旅行中での最南端のナポリに到着した。

これからの市内観光に出掛けるには丁度良い時間帯での到着である。

「ナポリを見てから死ぬ」といいう言葉も有るくらいなので、夜景の美しさが素晴らしいことでは有名なのだが、今回では日中での街中散策の観光となる。

ともあれ、町全体を見渡せそうなポメロの丘を目指して歩き始めたのだが、ナポリの街と云うのは一歩裏通りへと足を踏み入れてみると、随分、「コネコネ、こちゃこちゃ」といってまるで迷路の様な複雑さである。

かなりの時間を要しながら何方へ向かえば、目的地のポメロの丘であるのかも良く解らなのままに坂道をトボトボと歩いていた処、親切なイタリア人のカップルが車の窓から声を掛けてくれて、サンマルチノ修道院までを乗せて案内してくれた。

その言えば、イギリスを離れて大陸に渡ってからでは最初のヒッチハイクであった。

少々、空気が激々でいて、遠方の風景はやや霞々でいるのだが、それでも、丘の上から見下ろすナポリの展望は素晴らしくて気持ちが良い。夜景であれば猶更のことだろう。

三、四歳くらいかと思われる女の子を連れだドイツ人夫妻との会話が少々あったので、その女の子と一緒に写真に納まってシャッターを押して頂いた。

休息を兼ねた丘の上からの観光が一段落すると、ドイツ人夫妻も退散すると云うので、ナポリの駅までは車への同乗で送って戴いた。

一旦、駅に着いた処で、日本の友人知人に絵葉書などを出すのに、近くの郵便局へと足を運んだ。

葉書に宛名や手短なメッセージなどを書いている時に、局の窓口のお一人から声が掛かった。

「そのバッグにはカメラが入ってるの？ 見せて貰えないか？」

「ヒッ。 ああ、うすくはよ。 ちひん」

差し出すと、バッグの中からエルモ社製のハミリカメラを手にはしては、目がキラキラとして大変に嬉しそうな表情をされた。

「このカメラを売ってくれないか？ 幾らなら売って貰えるだろうか？ 是非、売って欲しい。 売ってほしい」

との熱心な突然の申し出には少々驚いた。

「ヒッ。 まだ、今は旅行の途中なので記録にも使っていますし、誰かに売ると云うのは考えたことがないですよ。 まあ、買った時の値段でしたら、五万円弱位でしたけど…」

「じゃあ、これでどうかな？ 売って貰えないだろうか？」

約六万〜七万円相当以上のリラ札を私の目の前に差し出した手で数えながら、畳みかけるように懇願された時には正直な処、驚きと迷いどろりではあった。

否、内心では喉の奥から手が差し出している様な心境でもあった。

そもそも、買った時の価格は確か、カメラ本体は四万九千円位だったのと、専用ではないケースを含めては五万円と少々だったろうか。

六万円相当の即金で買って貰えると云うことは、十分に採算が合うし、少々の利益にもなる。 目先の旅の資金にもなるとの皮算用でもあった。

また、それと同時に、これ迄の旅の記録としてフィルムに残し来ていたのが、概ね、終盤に差し掛かって来ているとは云え、まだ、あと十日間余りの期間もあるので、フィルムでの記録も最後まで撮りたいものと云う迷い処でもあった。

その辺の事情も説明したうえで、

「それじゃあ、今は、まだ旅行の途中なので、もう暫くはカメラを使いたいのですが、あと十日後くらいに、時間の都合が付いたら、もう一度こちらに来ますから」
との意向を伝えてその場を後にした。

ナポリから夕方の列車に乗り、ローマ・テルミニー駅への到着は二十一時頃であった。

歩いて直ぐ近くのテルミニー・ユースホステルにチェックインする。

当ホステルは1960年のローマオリンピック開催時での選手村として使用された建物だそうで、世界からの代表選手の宿泊施設と云うことは、それなりに充実した設備施設なのだろうかとの期待感もあったのだが、思っていたよりは簡素なものだった。

同宿の日本人若者が他に一人居て知り合ったので、翌日には一人で一緒にローマ市内の観光に出てみることにした。

(九月十二日、水 ローマ)

午前九時過ぎには一人でチェックアウトして街に出る。

テルミニー駅からトレビの泉、パンテオン、エマニエル記念塔、フォロ・ロマーノ、コロッセオ、カラカラ浴場跡等を見学して周ったが、九月も中旬に入ったとは云え、まだまだ残暑の厳しい一日であった。

夕方には早めにユースに戻り、早めの夕食を取る。

(九月十三日、木 ローマ～バチカン市国～フィレンツェ)

朝には九時にチェックアウトして街に出た。

午前中にはバチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂とその前の広場やバチカン宮殿等を見学。バチカン市国は、このサン・ピエトロ大聖堂とその前面に広がるサン・ピエトロ広場とバチカン宮殿、それに、大聖堂の背面に広がるバチカン庭園を包括した一帯が一独立国なのだから、ローマの市内を歩いている内には国境を跨いでの入国となる。

そもそも、サン・ピエトロ寺院は世界のカトリック教会の総本山であり、そのスケールの大きさと云い、荘厳華麗な建物景観と云い、内部の夥しい程の芸術性の高い彫刻の数々にも圧倒されるばかりである。

中でもひと際、作者の熱い思いと息遣いが伝わってきたのが天才ミケランジェロの代表作とも言われる聖母マリアに抱かれたイエスの像、ピエタ像であった。

この像に巡り会えただけでも、本当に、旅の疲れが癒されたとしても云うのか、この像を見つめていると有難い様な気もしたものだ。

前日にはローマ市内での他の主な観光地については、ほぼ一通りを巡っていたので、お昼頃の便では約二百八十キロほど北上してのフィレンツェに向かうことにした。

(フィレンツェ)

フィレンツェ駅に到着したのは午後二時を過ぎた頃であった。

早速、街へと出てみると、まさに、中世の街並みの中に一歩足を踏み入れた様な世界であった。

ローマが古代史の博物館だとすれば、このフィレンツェでは街の全体が中世の美術館とでもいった様な印象である。

そんな中でもサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂はその大きさと云い、壮観な芸術性と云い、ひと際立った建物だった。

この二か月間くらいの間、国境を越えながらの途上では、其々の国での様々な芸術性の高い建物や美しい街並みにはあちこちで目に触れて来たのだが、中学か高校時代の美術の教科書にでも載っていた様なミケランジェロ作のダビデ像が、屋外に展示されているのは驚いたものだった。

街中の至る所には有名な像が展示されているのだが、多分に、本物はアカデミア美術館等に収蔵去れているもののレプリカがこうして屋外に展示されているのだろう。

サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂やドゥオーモなどを見学したあとの夕闇が迫る頃には背中荷物の重さに、かなりの疲労感が溜まっていたものだった。

レプリカ広場のベンチに腰を落として暫しの休息では、さて、これからは何処に向かうか、どっしたものと、やや、やや、ポーンとしていた処に思わぬ、ちょっとしたハプニングがあった。

「日本人の方ですか？」

と、耳元がくすくすへられる様な可愛い日本語での声の掛かり、思わず目が覚める様な衝撃でもあった。

振り向くと、気が動転してしまいそうな程に可憐な、目の綺麗な若い日本人女性だった。

歳の頃は二十代前半くらいだろうか……。

やや小柄な印象であり、身の丈は一五三〜五センチくらいだろうか……。

「はい……。あ、あ、そうです。日本から来ました。……。」

「じゃ、あなたは。私は音楽の勉強でここへ来ています。」

「へっ。そうなんですか…」

「お一人で旅行されてるんですか？」

「エッ。ああ。ええ、そうですか？」

「フィレンツェは初めてですか？」

「ええ。今日の午後に付きました。凄いですよね。まるで、街の全体が美術館みたいで…」

「そうですよねえ。これからは何方の方に向かわれるんですか？」

「エッ…。ああ…。いや、特に、何処へと言うアテはないんですが…。あとで、駅での時刻表

次第でしょうけど、夜行に乗ったら、明日はスイスの方面でしようかね。」

正直な処、これ迄の人生上では女性との出会いの機会と云うのが、どちらかと云うと少なかったとは云え、ドキッとする程の可愛い女性からの突然の声掛かりだったので、とっさにフリーズしてしまった様だった。

かつてのスクリーン上では、幾度か見掛けたことのある『寅さんシリーズ』での寅さんの出逢いのシーンが過ぎた様な気がしたものであった。

もっ少しの機転が効いて、

「音楽は何の勉強をされてるんですか？」、「こ」ちらには、いつ頃からの滞在なんですか？」、

「いつ頃までの予定で…」

とか何とか、或いは、

「今夜は「のフィレンツェでもう一泊したいんだけど、何処か近くのユースホテルとかを「存じますか？」」

とか…。折角の声掛けと出逢いの切掛けと云うのを頂いたので、当方での機転を利かした対応の次第では、話の継続、展開の可能性と云うのは幾らでもあった「こと」だろう。

疲れていた「こと」で、最近では余り、日本語を話す機会が少なかったとはいえ、余りに突然の出来事だったので、自ら流ちょうな日本語が出て来なかった様でもあり、何と云う不覚なことだったろう。

おそろいへは、彼女にとっては日本語での会話の機会が殆ど無い生活環境の中での、日常の寂しさと日本への郷愁の中で、或いは、哀愁感の漂っていた私を見付けては、その井出達と外見からして、ほぼ百パーセント日本人に相違ないとの確信があったから「そ、わざわざ、近付いて来て声を掛けてくれた「こと」だろうかと。

シアアの団体客やグループの人にまで声を掛けると云う訳には行かないだろうから私に声を掛けてくれた「こと」だろうかと。

ともあれ、疲れ果てていたとは云え、私の方での愛想が足りなまま「、自らその場を後にしてしまっただこと、折角の貴重な機会を流してしまっただことには相違ないのであり、おそろいへは、彼女の方でも、もっ少しは話をしたかった「こと」だろうかと思うと、彼女への申し訳ない様な気持ちと後悔の念が尾を引いたものだった。😞

二十時半の夜行に乗り、明日朝のスイス方面を目指すことにした。